

コーチが身につけるべき内容と効果的な習得方法に関する コーチ教育の研究動向

発表者 渋谷 宗馬
指導教員 吉野 聡

キーワード：文献研究、教授方法、教授内容、海外

1. 緒言

近年、日本ではコーチを育てることを目的とする「コーチ教育」についての論文が増加している。文献検索サイト「google scholar」で「コーチ教育スポーツ」というワードでキーワード検索を行うと、2006-2010年に4本、2011-2015年に12本がヒットする。年々の論文数の増加から、コーチ教育に関する関心の高まりがうかがえる。

しかしながら、図子（2015）は「わが国における体育系大学の多くは「コーチ学」「コーチング学」という名称の授業を行っているにもかかわらず、授業の中でどのような体系的な内容を行うべきかに関する議論はほとんどなく、担当教員の裁量によって授業が行われているのが実際である」と指摘している。加えて「次世代のスポーツ界を担う優れたコーチを養成し日本のスポーツ界を発展させるためには、適当なコーチングモデルと授業内容を検討し、共通した内容とレベルのコーチング授業をすべての体育系大学で展開する」という課題を述べ、関心が高まってきている一方で、取り組みについては遅れがみられることについて指摘するものも見受けられる。

一方海外において、「google scholar」で「coach education」「sport」というワードでキーワード検索を行うと、2006-2010年に1220本、2011-2015年に2440本がヒットする。海外におけるコーチ教育への関心の高さはすさまじく、海外におけるコーチ教育研究の動向を整理することは、我が国において多くの示唆を与えることが予想される。

Rynneら（2009）は2007-2008年において発刊されたコーチ教育関係の研究動向をまとめているが、その視点は①公式なコーチ教育におけるプログラムの有効性やコーチングプロセス、性の問題に関して②トレーニングに影響を受ける講習や大学との連携③コーチが行ってきた競技経験の影響や若いスポーツコーチ育成、短い期間の講習の必要性について④全体の分野⑤英語以外の文献⑥スポーツ特有の雑誌や論文の6観点であった。特に①の性の問題に関しては、我が国においても文部科学省（2013）で女性コーチの増加について指摘されており、今後我が国が取り組んでいくべき課題の1つとして考えられる。しかしコーチ教育に関する研究は増加の一途をたどっているが、Rynne以降研究動向を整理した論文は見受けられない。海外でのコーチ教育研究の関心の高さを考えれば、Rynneらの論文以降に書かれた海外の文献をまとめることはコーチ教育発展のために意義があると考えられる。

そこで本研究では、わが国におけるコーチ教育発展のための一資料とするため、海外において2014-2015年の2年間に出版された論文を読み、動向研究を行う。

2. 研究方法

2-1 調査対象

文献検索サイト ERIC を利用し、「coach education」「sport」をキーワードとする検索を行い、ヒットしたものの中で、2014-2015年に書かれ、かつピアレビューされていないものを除外した論文8本を収集した。

2-2 調査方法

対象とした論文を①教授内容②教授方法の2観点に分類し、まとめた。スポーツ教授学において大きくこの2つに分類されるため、この視点から分析を行った。

3. 結果と考察

3-1 教授内容

トレーニングにおけるコーチの振る舞いや、コーチングを行う際の知識についての認識に関心が多く集まってきている一方で、実際のゲーム中におけるコーチの振る舞いに焦点を当てた論文は少ない。Mouchetら（2014）は、ラグビーの試合におけるコーチと選手の会話を特徴づけ、概念化することを目的とした研究を行った。結果として、多くのデータから試合中のコーチのルーティーンやコミュニケーションの特徴を概念化することができた。加えて、コーチ教育において、コーチの振る舞いの特徴について学ぶなど、コーチの経験に基づく学習方法の構造化が必要だと述べている。Stewart（2014）は自身の研究で、なぜパブリックスクールにおいてコーチが再雇用されない（解雇される）のか、その理由を確認し、コーチ教育の内容確立のための情報として使うことを目的とした。再雇用されない理由をまとめるため、①コーチの振る舞い方②コーチングの有効性の2種類に分類した。結論として、①の中では「雑な振る舞い」が、②では「教えることの有効性」が最も多い理由として挙げられた。逆に優秀なコーチは、彼らの生徒に対して積極的な環境を提供し、高め、維持していくという競争的な環境の中で知識を身につけていると述べた。高いレベルのコーチを育成するために、コーチ教育者は初心者に対して知識の土台を確立する必要があり、そのために、コーチ教育の中により具体的な指導例を組み入れていく必要があると結論付けた。また Stewart（2014）は様々な運動競技において、コーチの振る舞いがスポーツマンシップ、ゲームズマンシップに与える影響について検討した。結論として、ホッケーやフットボールなどの接触スポーツにおいて、脅しや痛み、怪我を与えることが試合の一部として認められすぎている現状がある。相手を騙すようなことはプロレベルでは行われているが、若い世代のスポーツには受け入れられていない。それなのに、プロフェッショナルモデルを真似するコーチが多くいるなど、そのような現状があるのはコ

ーチによる影響が大きい。相手に対して脅しや痛み、怪我を与えることを要求するようなコーチの振る舞いを改善することが、コーチ教育で求められると述べている。Roberts (2014) は自身の研究で、この30年間でユースやエリートスポーツに関して起こっている年齢差別の現状がある中で、fictional conversationを通して、相対的年齢評価の概念について調査することを目的とした。結論として、fictional conversationが相対的年齢評価の哲学的位置を考えさせ、ユーススポーツにおける相対的年齢評価の潜在的な印象を減少させると主張した。また、相対的年齢評価の印象を軽減していくために、ユーススポーツコーチに対するコーチ教育の中で教えていく必要があると結論付けている。

全体としてコーチの振る舞い方や言葉が自身や選手に与える影響について調査した研究が見受けられた。結論として、コーチ自身の言動が選手に与える影響力が大きい一方で、改善すべきコーチの態度やコーチ教育体制が多くあることが明らかになった。我が国において、選手にとって悪い影響を与えるコーチの振る舞い方を改善するため、コーチ教育の学習内容をより構造化することやより良い学習環境の提供が課題として考えられる。

3-2 教授方法

ERICで参照できるここ2年間の文献において、コーチに対する教授方法についての研究が4本見受けられる。Nelsonら(2014)の研究では、Carl Rogersの人中心学習をコーチ教育に用いる有効性について調査している。結果としてCarl Rogersの人中心学習が純粋にコーチ教育に適合するならば、多くのコーチ教育現場で活用されると結論付けている。また、Stoszkowski(2014)の研究では、互いに高めあう組織とするcommunities of practice(COP) = 実践共同体がコーチ教育に与える影響について調査している。ここでは、コーチ教育の中にCOPを導入していくことで、コーチたちに有効な学習機会を与え、適切な教育方法として確立すると述べている。Simonら(2014)は、case method teaching(CMT)がコーチ教育に有効な手段かどうかを調査した。イングランドのコーチングを専攻する大学4年生41人にソクラテス式問答法の授業を行ってもらった結果、コーチ教育にCMTを用いることは、特定の場面を提示するのにかなりの時間を要するなど、注意すべき制約が多々あるが、コーチ教育に非常に有効な手段であると結論付けた。Christensen(2014)は、デンマークのサッカーコーチに対する質問調査と、「biographical learning」という概念を使うことで、専門的知識の観念を発達させるためにエリートコーチの学習の場を調査した。特異的な学習の場を分類するため、Werthnerら(2009)の①間接の学習の場(講習会や公式のコーチ教育)②直接の学習の場(仲間との会話、非公式のコーチ教育、現場の監督)③内部の学習の場(自身の中にある考え方を再解釈すること)の3つの分類を用いた。結論として、(1)自己作成や自己編成の学習はコーチたちが与えられた環境の中で学んだことを再解釈し、彼らの認識構造を修正すること(2)コー

チ同士のコーチング発達に関する具体的な会話は、コーチの学習方針を表しているように思われること(3)3つの学習の場を織り交ぜてコーチ教育に導入していくことについての議論は、未来のコーチ教育にとって有益なものだという3つの観点について述べた。そして、未来のコーチ教育学習には「biographical learning」を組み入れていくべきだと結論付けた。

日本サッカー協会では、指導者の指導技術向上や最新の指導理論を知るために、「リフレッシュ研修会」を行っている。しかしこれは日本サッカー協会が定めているJFA公認指導者ライセンスでC級以上を取得した指導者のみに行われているものであり、学生等への有効な教授方法の提供も必要と考える。加えて、文部科学省(2013)で大学等の教育課程において特に高い倫理観と高度な知識・技能を持ったコーチの育成が求められており、教育課程でのコーチの養成が期待されている。したがってコーチを目指すすべての学生が大学等の教育課程の中で実践に活きるような指導技術を身につけられる教授方法を検討することが求められると考える。

4. まとめ

コーチとして活動する際には、競技者としての経験だけでは不十分であり、コーチの育成制度を充実させることが必要だと考えられる。資格取得や研修受講の意義・メリットを明らかにして、コーチの育成過程を経るよう促していくべきと考える。加えて将来コーチとしてのキャリアを歩むことが想定される競技者について、文部科学省(2013)で「競技者の時代から『デュアルキャリア』の考え方の下、コーチの育成過程を経るような仕組みを広げていくことが重要だと考えられる。また、大学等の教育課程においては、それを経た者が学校の教員等としてコーチングを行うこととなることを踏まえ、特に高い倫理観と高度な知識・技能を持ったコーチの育成を図ることが求められる」と指摘している。しかし、緒言で述べたような課題が我が国で指摘されている現状とこの文献研究を通して、今後は大学等の教育機関をはじめとするコーチ教育のさらなる体系化が、今後の課題と考えられる。

5. 文献

- 1) S.B. Rynne, C. J. Mullet & Tinning(2009) A review of published coach education research 2007-2008
- 2) Alain Mouchet, Stephen Harvey and Richard Light(2014) A study on in-match rugby coaches' communications with players: a holistic approach
- 3) Mette Krogh Christensen(2014) Exploring biographical learning in elite soccer coaching
- 4) 関子浩二(2015) 体罰・暴力根絶のためのコーチング学からのアプローチ法
- 5) 文部科学省(2013) スポーツ指導者の資質能力向上のための有識者会議 他